
恐怖絵画

佐藤河岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖絵画

【Z-ONE】

Z6006D

【作者名】

佐藤河岸

【あらすじ】

あなたが恐ろしいと思つ絵はいつたいどんなのですか?自分の経験から考えた恐怖絵画について、エッセイ風にまとめました。

(前書き)

短いです。タイトルからホラーっぽい感じを取けるかもしれません
が単なるホラーセイです。軽いです。

「もう一度その顔を見たくない」

と思いつつ、絵画は、私にはない。

小説や漫画、映画なんかは「もう一度と見ない」と決めた作品はあるが、絵画については、そう思ったものは一度もなかつた。専門家や絵画をこよなく愛する人に比べればまだまだだろうが、この歳にしては私は大分多くの絵を見てきた方だと思う。「別にまた見るほどものではない」というものはある。どうにも印象に残らない、自分の趣味には合わない絵だ。それだって「見たくない」ほどではないし、今見たらまた変った感想があるかもしれない。

逆に「また見てみたい」と思う作品はたくさんある。

その絵の中の情景がはつきりと想像でき、その空氣や匂いも感じられるもの。色づかいやそこに描かれた人物の表情がたまらなく魅力的なものもある。かつてその作者が同じキャンバスの前に座つていたのかと思うと、いつもたつてもいられなくなるような、不思議な高揚感を味あわせてくれる。

その中で、今もう一度見たいと思つのは、幼いころ見た抽象絵画である。

別に美術館や絵画展などで出会つたわけでなく、地方の公民館で何度も見かけただけのものだ。

両親が演劇サークルのようなものに入つており、その練習にいつも同じ公民館が使われていた。まだ留守番させるような歳ではなかつたため、私と兄はだいたいそこに連れて行かれ、練習の間はロビーで遊んだり本を読んだりして過ごしていわけだが、そこに掛けられていた絵が私は恐ろしくてたまらなかつた。

それは、色合いの暗い地味な抽象画だった。

かなり幼かつたためはつきりとは覚えていないのだが、首と四肢がないマネキンのような女の身体が描いてあり、それが真ん中から縦に白と赤で色分けしてある。

ただのつべりと分けてあるわけではなく、その絵の具がどろりと下方まで垂れているような表現で、その様子が何ともいえずおどろおどろしく、背景も黒っぽい緑の暗澹としたもので、不快な印象を受けた。公民館の入口に飾つてあり、来るたびに目に入る。遊んでいる間も見ないようにしようと考えていたが、そう思えば思つほどついちらちらと目をやってしまう。

恐ろしい、不快だと思つになぜ私はその絵に魅せられてしまったのだろうか。

それは明るいさわやかな口当たりのものではなく、氣味の悪くいやらしい、人間の狂氣を感じさせるようなものだった。それなのにまた見たいと思わせる何かがあり、そこに私は知らず知らずのうちに惹きつけられていたような気がする。

他人にとってその絵は特に怖くもなんともない、ただの油絵でしかないかもしれない。

恐怖を感じる対象は人によつて違う。人間の内臓が写実的に描かれているものが氣味が悪いと思う人もいるし、ウジ虫がご婦人の口から湧き出て蠢いているものを不快と思う人もいるだろう。ゴーストがいる絵が気持ち悪いわ、なんて人もいるかもしれないし、暗い荒野に立ちすくむ男の見開かれた瞳に、底知れぬ恐怖を感じる場合もあるかもしれない。

それはやはりその人が苦手とするものが描かれているから恐ろしいと思う、というのもあるが、それが不快だと思うのは、心の奥底にある醜い「何か」を見せつけている感じがするからなのではないか。「気持ち悪い、嫌な絵ね」

と眉をひそめ、自分はいかにもそんな絵を好み、常識人である

とアピールしてはいても、実際はどうしようもなくそれに惹かれているからこそ、そんな強い感情を表してしまつ。自分でも気がつかなかつたような嗜好が、それによつて抉り取られる。上品な格好をして、可愛らしい声で笑い、アウトサイダーには侮蔑を忘れない、そんな「普通」のふりをしているあんたらにも、こんな下品で醜い感情があるんだぜとその絵は囁いて来る。

では私はあの女の絵に恐怖を感じる理由は何か。

広いロビーに兄と二人きりで、演劇に夢中になつた両親が私たちを置き去りにするかもしれない、という寂しさがそれと結びつき、恐怖しさを倍増させたのかもしれない。それとも、両親のささやかな楽しみさえ許せない、いつでも自分に意識を向けていて欲しいという独占欲、その自分本位な醜さをその絵の底知れない印象と心の中でダブらせていたのかもしれない。

人を明るく楽しい気分にさせる絵が優雅な歌声であるなら、人に恐怖を感じさせる絵は長い絶叫であると私は思う。

その気違ひじみた叫びの中、いつたいどれほどの感情を汲み取ることができのか。それが切実なものであればあるほど、人の心に残りうるものになる。たとえそれが一見無機質で、感情がないように見えたとしても、低いうなり声をあげゆつくり迫つてきて、思ひもよらない場面でそれが蘇り、人をやるせないうすら寒い気持ちにさせる。

私が「怖い」と思ったあの絵は、別に有名な作家が描いたわけではなく、田舎の公民館に飾られたいして多くの人の目に触れられるような作品ではなかつた。

だからと言つてそれが駄作であると決めつけることはできないが、ほとんどの人にとって印象の薄いものであつたことは確かである。しかし私は、あの絵にまた会いたいと思うし、影響を受けている。

これからもきっとあの絵は人気のないリビングと、そこで行つた数々の遊びと感情とともに私の頭の中に残り続ける。

あの作品のこめられた感情は何だったのか。今も静かに何かをささやき続け、私のような子供に恐怖を『えているのか、それとももうどこにも存在していないのかもしない。

私もある絵のように誰かの心に残る何かを作り出すことができるだろうか。

狂氣の絶叫が人の心中に一生巣食つことができるものであるとしたら、そんなものを創造するような纖細さ、才能は私にはない。このまま誰の目にも触れず、私の中にあるものが消えてなくなってしまうのかと思うと、ただただ恐ろしく、胸がやけるような気持ちになる。明日死んでしまうかもしれない。終わりはいつやつてくるかわからないのに、何も形にしていない。長い生活の怠惰の中、情熱はうやむやにされ、「そんなことも考えてたっけ。結局チャンスがなかつたんだよ」と言い訳をして、何もかもなかつたことになってしまったのか。これこそが私を創作に向かわせる唯一の弱よわしい叫びである。人によつては些細なことで、鼻で笑われてしまうようなものかもしれない。誰からも見向きされず、才能のかけらも感じられないつまらないものだとしても、私は叫ばずにいられないのだ。脳の中では文字は蠢き、常に私に呼びかける。「早くそれをやれ!」口から手から虫が湧いて蛾にならず干からびて死んでいく。それをみているだけで、何もできない。なにもしないのだ。

私が今、一番恐ろしいと感じるのは、不気味な女の絵でも、グロテスクな人間の絵でもなく、普通の家庭に育ち、普通の家庭を作り、普通に死んでゆく人間の描かれた絵なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6006d/>

恐怖絵画

2010年11月26日13時42分発行